

牧師室から (2022.12.4)

母が白内障の手術をすることとなった。少し前に、「1本の物干しざおが2本に見える」と母が言うので、私は驚いて、もしかしたら脳の方かとも思い心配したが、とりあえず眼科に行ったら、白内障でも屈折の関係でそのように物が二重に見えることがあるということ、また白内障も進行していると言うので、近くの基幹病院で入院手術をすることとなった。

ところで旧約聖書続編にトビト記というのがあるが、そこにはトビトが目に白い膜ができて見えなくなるのだが(ここでは彼が外で眠っていた時に雀の糞が目に落ちていたためである)、息子のトビアが魚の胆のうでもって治療したということが記されている。調べてみると、古代にはそのような治療法があったらしい。

「・・・トビアは父のところに行き、魚の胆のうを手に取り、父の目に息を吹きかけ、抱きしめて言った。『お父さん、心配には及びません。』そして胆のうを父の目に塗り、手当てをした。更に両手を使って父の眼の縁から白い膜をはがした。トビトはトビアの首に抱きつき、声をあげて泣いて言った。『お前が見える。わたしの目の光であるわが子が見える。』そして言葉を続けた・・・」(トビト記11章10～14節)

(鈴木淳一牧師)